ありふれた チョコレート 1

秋川滝美 Takimi Akikawa

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

目次

ありふれたチョコレート1　5
【書き下ろし番外編】
料理の腕前は……？　373

ありふれたチョコレート1

第一章　特売チョコレート

「相馬、今日残れるか？」
「なんでしょう？」
「来週木曜にやる予定だった会議、月曜になった」
「わかりました」
　それだけの会話で相馬茅乃の終電は決定する。いや、もしかしたら終電どころか、タクシーのお世話になるかもしれない。この上司がこういう口調で電話をかけてきたときに、業務がすんなり終わったことなど一度もない。そもそもちょっと残れば終わるような量と質ならば、茅乃の都合など確認すらしない。
　茅乃の上司、瀬田聡司は株式会社安海の専務を務め、さらに営業部長を兼務している。
　そう聞くと、今時どんな小さな会社だと思うが、これがけっこう立派な一部上場企業だから不思議だ。なんでも、会社から専務就任を打診されたときに営業畑を離れたくないと蹴りかけたらしい。どうしてもと追いすがる会社に、兼任なら……とようやく首を縦に振ったというから強者である。
　茅乃はそんな上司に、もう五年も使われている。同期連中があちこちの部署を転々とする中で、茅乃は一度も異動しなかった。大学では会計学を学び、営業など性に合わない、人よりも物か数字相手がいいという茅乃の思いは木っ端微塵であった。

　瀬田聡司は、茅乃が新人研修で営業部に行ったときには係長だった。
　新人教育など面倒だといわんばかりの杜撰な対応だったが、三週目に入ったあたりから俄然厳しくなった。以後、スパルタ街道まっしぐら。いつの間にやら茅乃はとんでもなく鍛え上げられ、今や押しも押されもしない営業ぶり。ついでにお洒落も恋バナも遥か彼方の立派なお局様である。
　瀬田が出世するたびに茅乃の身分も引き上げられて、今ではめでたく営業部長補佐。但し、その実態は、瀬田の使いっ走り。お局が使いっ走りって変だろう！　と叫んでみても、本来使いっ走りになりそうな、もしくはなりたそうな若手は瀬田を怖がって近よりもしないか、瀬田自身が寄せ付けない。
　おかげで使いやすいパシリは三十路間近だというのに、ことある毎に全力疾走させら

れる。
まるで胸元に「瀬田係」と名札が貼ってあるかのように、使われまくっていた。
そろそろ縁を切りたい……
それが茅乃の正直な感想だった。今日にしても、せっかくの土曜休みを明日にひかえた金曜日。友人たちと呑みに行く予定を入れていたのに、またしても突発残業でキャンセルだ。
かといって、仕事と遊びを天秤にかけて遊びを取るほど人生に余裕はない。茅乃の生計を担ってくれそうな相手が発見できていない以上、仕事すなわち収入を確保することは大切だった。
やむなく茅乃は、同期で入社したときからの友人、毛利ルミに連絡を入れた。

『またなの？』
呑み会ドタキャンはこれで何度目だろう……と、ため息混じりで送ったメールに即レスが来た。
『ごめん。例によって残業』
『せっかく、おすすめ物件を紹介しようと思ったのに』

そのメールを読んだ瞬間、少しだけ瀬田に感謝した。
毛利ルミは悪い友人ではないが、茅乃が男っ気のないまま仕事ばかりしていることを必要以上に心配していて、何かにつけ誰かを紹介しようとする。よくもまあそんなに男のストックがあるものだと感心するぐらいだ。自分はすでに立派な彼氏をキープしているから、目につく男をどんどん周りに紹介してやろうと思っているのかもしれない。
ルミ曰く、何度紹介しても誰とも付き合おうとしない茅乃は、大いにチャレンジ精神を刺激されるとか。いずれにしても茅乃にしてみればありがた迷惑そのもの。相手の男にしても、どうせならもっと若くてかわいい子を紹介してほしいだろうに……
『もう私のことは諦めなよ。脚力だけが自慢のお局じゃ、相手が気の毒！』
字面で見ると我ながら酷いな……と軽く落ち込みながらメールを送ると、すぐにまたレスが来た。
『ご心配なく、毎度毎度相手のご要望に従って紹介してますから』
世の中には、そんなにキワモノ好きが多いのか？　とは思ったが、これ以上メールをやり取りしている時間はない。最後のメールをスルーして業務に戻った茅乃は、瀬田が必要とする会議資料一覧をざっと見て、手っ取り早く済みそうなものから片付け始めた。

瀬田が帰社したのは午後七時前だった。既にほとんどの資料を作り終え、もしかしたら終電にならずにすむか？　という茅乃の希望を打ち砕くように、さらなる資料の作成が指示される。

やっぱりなあ……とため息混じりに自分の机に戻り、必要なフォーマットを引っ張り出した。

文句を言う労力も惜しんで、ひたすら仕事に集中する。ふと時計を見たときには、すでに午後九時。どうりでお腹がうるさく鳴っているはずである。

あー……部長が戻る前に軽くなんか食べとけばよかった……

あわよくば食事に行ける時間に帰れるかも、などと思った自分はつくづく甘い。いったい何年この男の部下をやっているんだ、なんてぐだぐだ考えながらキーボードを叩いていた茅乃の目の前に、しゃれた紙箱がぬっと差し出された。

「腹減ってるんだろう？　とりあえず食っとけ」

なにかと見れば、いかにも高級そうなチョコレートの詰め合わせ。

「うわ……レディ・Gだ！」

一粒が牛丼一杯よりも高いと言われるブランドチョコである。その神様みたいなチョコレートが箱一杯に詰められている。これ一箱で茅乃の食費一週間分はするのではないだろうか。

「なんでこんな物持ってるんですか？」

「机の上に、宛名付で置いてあった」

「それ、バレンタインチョコでしょ？」

カレンダーを見るまでもなく、昨日はセント・バレンタインデー。この高級品が義理であるはずがない。きっと誰かの本気満載のチョコレート。

そんなもの、脳天気に部下に差し出すな！　気楽に口に放り込めるはずがない。むしろ怨念が喉に詰まるわ‼

毎年、瀬田聡司のもとには大量のチョコレートが届く。しかも、本人が受け取らないものだから、外回りで留守の間に勝手に机の上に積み上げられていく。さらに他営業所からメール便に乗ってくるものもあるのだ。そのほとんどが本命チョコだというから恐れ入る。

瀬田聡司は三十四歳。ご面相はなかなか優れもの、スタイルもセンスもお見事。仕事もできるし出世街道まっしぐらの有望株、もちろん独身――とくれば、人気が高いのも当然かもしれないが、あの性格はいかがなものか。

五年も一緒に仕事をしている茅乃にしてみれば、あんなに厳しくてうるさい男なんて

まっぴらごめんである。第一ああいうご面相の男は、学生時代から相当遊んでいるに違いない。

遊んでいるということはそれだけ捨てた相手も多いということ。この男が捨てられるなんてへまをするはずがないのだから。

茅乃は、並みいる美女を滅多斬りにしてきただろう男の遍歴に、自分も加わりたいと思う女の気が知れなかった。

「本気満載のバレンタインチョコなんて食べたくありません。ご自分でどうぞ」
「だって『レディ・Gだ！』って目の色変えるぐらいのものなんだろ？」
「そりゃそうですけど、私に食べさせるために買われたものじゃありません」
「俺がもらったものを誰に食わせようが、俺の勝手だ」
「部長、そのうち刺されますよ」
「背後には気を付けてる」
「自覚はあるんですね。とにかく私は食べませんから」
「どうせホワイトデーのお返しは、お前が買いに行くんだからいいじゃないか」
「嫌です！　というか、今年もそれ私の仕事なんですか⁉」

勘弁してほしい。毎年毎年十個や二十個ではきかない数のお返しを買いそろえるのに、茅乃がどれだけ苦労しているか、わかっているんだろうか。そもそも何故それを茅乃がやらねばならないのだ。

「嫌なら放置でいいって言ってるじゃないか。その方が金もかからないし」
「酷い‼　せっかくみんな一生懸命選んで持ってくるのに！」
「お前がそう言うから毎年返してるんだ。お前が買いに行くのは当然だろう」
「屁理屈です！」
「屁理屈じゃないさ。まあこれが嫌なら他にもあるぞ、適当に食え」

と言って、瀬田は机の後ろにある段ボールの大箱を示した。

ああ……今年もまたすごい数だ……。これを数えて、価格を見積もって、お返しを買うのか……。なんで本人に差し出したら受け取らないようなものをわざわざ持ってくるのだろう。

「いりません！　それにチョコなら持ってますから自分のを食べます」

そう言うと、茅乃は机の中からごそごそとチョコレートの箱を取り出す。特売の一口サイズチョコで、どこででも買える当たり前の庶民仕様。レディ・Gにはほど遠いが、癖のないその味は、茅乃のお気に入りである。

鼻息荒く紙の箱を開け、一つ取り出して包み紙を剥がしたのを、口に入れ……る前に奪われた。お気に入りの一口チョコは、あっという間に上司の口の中に消える。
「これ美味いよな」
「部長！　なんで人のもの取るんですか！　レディ・Gを食べればいいでしょ‼」
「外国ブランドはしつこい。これぐらいがちょうどいい」
「製造会社が聞いたら泣いて喜びますが、これは私のです」
「レディ・Gと換えてやろうか？」
「嫌ですってば」
「けちけちするなよ。二、三個よこせ。俺だって飯食ってないんだぞ」
「誰のせいでそうなってるんですか！」
「会議を月曜に変更した奴？」
「誰ですか？　社長？」
「あ……俺だな」
「やっぱり部長のせいじゃないですか！」
「悪い悪い。じゃ、これ、もらっとくぞ」
そう言いながら瀬田は、茅乃が握っている紙箱から強引にチョコを抜き取って、機嫌

よさそうに自分の机に戻っていった。
結局取られてしまった……ああ私の貴重なカロリー源が……なんて、嘆いていても仕方がない。茅乃は新たに剥いたチョコを一つ口に放り込み、気を取り直して書類の作成を続けた。
全ての資料が準備できたのは、日付が変わる頃だった。

「これで最後だ。悪かったな、遅くまで」
「お疲れさまでした」
悪いなんて本当には思っていないくせに……と心の中でぼやきながら、平然と言葉を返すのはいつものことである。ぎりぎり終電に間に合いそうだから、とりあえずよしとしよう。
「じゃあお先に失礼します」
「今日、車だから送っていこうか？」
「大丈夫です。まだ電車ありますから。車ならこの大量のチョコ、ちゃんと持って帰ってくださいね」
そう言うと、茅乃はさっさと部屋を出る。こんな時間に瀬田に送られているところを

見られたら、チョコレートの贈り主たちに刺されかねない。夜道よりもそっちの方がよほど危ない。

「相馬」

部屋を出た茅乃を、瀬田の声が追いかけてきた。振り返るとドアのところに佇む男前。ビジュアルが高得点だけに、性格の悪さが実に惜しい。

「なんですか？」

「チョコレート、サンキュー」

「強奪したくせにサンキューじゃないでしょ！」

茅乃は、意味ありげに笑う瀬田を心の中で『この性悪上司！』と罵って、エレベーターに乗り込んだ。

†

茅乃を残業に追い込んだ会議が朝一番で始まり、週明けの業務が順調に流れ出す。瀬田の机の後ろに置いてあった大箱が消えたところを見ると、ちゃんと持って帰ったのだろう。存在が消えればそれ以上気にすることはない。もう数も価格も茅乃には調べられ

ない。今年はぜひともお返しも自分で買ってほしいものである。

本来なら金曜日にすませる予定だった先週の業務報告をまとめるうちに午前中が過ぎていった。

『ランチどこ行く？』

ルミがメールを送ってくる。時計を見ると確かにもう昼休み直前。多分、先週のドタキャンのお詫びに奢ることになるんだろうな……と、茅乃は軽く覚悟する。

『どこでもいいよ。エントランスで待ってて』

返信したあと自分の今日の予定を確かめると、午後一番で取引先を回ることになっていた。茅乃は、食後そのまま出かけてしまえばいいだろう……と、鞄と上着を持ってエントランスに向かう。

「あいかわらず時間無視して働いてるね。メール送らなかったらお昼だって気付かなかったでしょ」

ルミの軽い嫌みを聞き流しながら歩いていると、ちょうど会議を終えたところらしい瀬田がエレベーターから降りてきた。社長やら常務やらも揃ったお偉方ご一行様である。

「お疲れさまです」

周りにいた社員たちが一斉に道を空ける。どこの大名行列だよ……と思いながら、茅

乃もそれに倣った。変に目立って瀬田に見とがめられると面倒である。会議のあとは昼食会の予定になっていたから、恐らくお偉方は、どこかの料亭にでも向かうのだろう。

「あいかわらず見目麗しいことで」

社用車に乗って去っていった重役たちを見送って、ルミがため息をついた。

「誰が？」

答えはわかってるけど……と思いながら、茅乃は訊いてみる。

「専務に決まってるでしょう？　あんたいいわよねー毎日専務と仕事できて」

「専務……ねえ……」

正確に言えば、茅乃が毎日目にしているのは専務ではなく、営業部長としての瀬田である。

そのせいか、重役然として社長一行に紛れている彼は別人のように見える。

もしも部長が黙って専務になっていたら、今ごろ私の上司は別な人だったんだろうな……

そう考えたとき胸の奥がちくりと痛んだのは、あまりにも長く彼の部下でいたから……。そうに決まっている。入社以来の上司が急に『チェンジ』となったら誰だって多少は困惑する。

「でも専務もいつまでも二足の草鞋ってわけにはいかないわよね」

自分の思いに囚われていた茅乃は、ルミの声にはっとしてそちらを向いた。

「そう……かなあ……」

「当たり前よ。うちの会社そこまで小さくないでしょ？　専務としての仕事も半端なく多いし、営業部長はそろそろ引退させられると思うわ。今だって相当圧力がかかってるはずよ」

来年度が始まるまでには、営業部長退任を余儀なくされるだろう……とルミは言う。

人事部にいるルミが言うのだから、それは多分本当のことなのだろう。そういえば先週作った資料も、引継ぎ書類に見えなくもない。もう引継ぎが始まっているのか……

「瀬田部長を専務に取り立てたあとは、娘と結婚させていずれ社長に、っていうのが社長の目論み。営業部長なんてとっとと辞めさせて、社長教育始めたいんじゃないの？」

「えー!?」

「こんなことで驚くの、あんたぐらいよ」

じゃあそれは周知の事実なのか？　と茅乃は目眩に襲われた。みんないったいどこでそんな情報をゲットしてくるのだ……

「社長が専務を気に入ってるのは昔から有名だし、社長の娘が専務を気に入ってるのは

もっと有名じゃない。一人娘なら婿取りは必至。親子の利害が一致してるんだから、こうなるのは当然でしょ」

「そこじゃないよ。いずれ逆玉に乗るのはわかってたけど、秒読みとは知らなかっただけ……」

会社近くのパスタ屋で、カルボナーラとサラダのセットを食べながら茅乃はぽつりと呟いた。

瀬田ならば、逆玉を逆玉と感じさせないぐらい立派な社長になることだろう。社長の娘というのも、何度か見かけたことがあるが、これまた性格のよさそうな美人。さぞお似合いの夫婦になるに違いない。

「意外……」

口に運びかけたパスタフォークを、宙で止めたままルミが目を見開いた。その表情に、茅乃の方が驚く。なにかおかしなことを言っただろうか……

「なにが？　逆玉じゃないの？」

「いや、それじゃなくて……あんた、もっと落ち込むかと……」

「なんで？」

「瀬田係、失職だよ？」

「別にいいけど？　首になるのは嫌だけど、そうじゃないならいいじゃない」

「もしかして無理してる？」

「だからなにが？」

「専務のこと好きじゃないの？」

「はあああ⁉」

なんでそんな認識が⁉　と驚くあまり、ルミにフォークを突き立ててしまいそうになった。

確かに茅乃は瀬田係である。だがそれはあくまでも業務上のことであって、そこに色恋が混じる気配など一欠片もない。瀬田は優れた上司だと思うし、男としての評価が高いことも知ってはいるが、だからといってそれが彼を慕う理由にはならない。さらにあちらとしても、茅乃ごときに恋慕されては迷惑もいいところだろう。あり得ない。

そもそも迷惑じゃないとしたら、もうとっくに合意でどうにかなっている。五年も手をこまねいているなんて全く瀬田らしくない……。いや、なんでそんなところに思考が飛んでるんだ、私。前提が崩れかけているぞ……瀬田聡司相手に恋愛感情を発生させるなんて仮定でも許されない。駄目だと言ったら駄目だ！

「ないって！　だから部長は安心して逆玉にお乗りください、だよ」

茅乃はあやふやな想いを振り切るように、きっぱりと宣言した。
「ふーん……そうなんだ……？」
何故か納得がいかないような顔をしつつも、ルミはデザートメニューを眺め出す。きっとその払いも茅乃に回す気でいるのだろう。

「ええー⁉　じゃあとうとう瀬田係解任かあ！」
その声は、後ろのテーブルから聞こえた。
ブースごとにしっかり区切られた造りのために、彼女らは、すぐ後ろのテーブルに当の瀬田係がいるとは思ってもいないのだろう。声の主たちは、どうやら総務課ご一行らしい。
思わず耳をそばだてても、瀬田係本人なのだから許されるはずだ。
「来春の人事で、専務は営業部長の任を解かれるそうよ。かなり渋ったらしいけど、どうにもこうにも専務の仕事が多すぎて営業まで手が回らないんですって」
「そりゃそうよね。元々無理がある話だもの。で、どうなるの？　瀬田係は」
「社長の娘の意向により、僻地転勤ってところじゃないの？」
「怖いねえ……女の悋気は」

「気の毒なのは相馬さんよね。仕事できるのに」
「全くよねえ……」
その言葉にいくつかの相づちが続き、瀬田係についての噂話は終了となった。
気の毒認定された茅乃は身動ぎすらできず、しばらく固まったあとで、ようやく向かいのルミの顔を見る。ルミはすっと目を逸らした。
なるほど、人事部もご存じというわけか……。知っていても、知っているとは言えないのが友人としては辛いところだろう。
「ごめんね……茅乃」
「いいよ。人事の守秘義務はわかってる……でも長年の友情につけこんで、ひとつだけ」
「なに？」
「春の人事異動リストに、私の名前が載りそうなんだね？」
わずかに見開いた目が全てを物語る。イエスでもノーでもない反応。それがルミの精一杯に違いない。
「ありがとう」
心の準備ができることに感謝をすべきだろう。身の振り方を考える時間を与えられたのだ。

そう自分に言い聞かせてみても、決して気は楽にならないけれど……

選ぶ気がすっかり失せたデザートメニューを放棄して、茅乃はため息をつく。同じようにメニューを放り出したルミと、目で合図をしてそっと席を立った。

「専務のことだから、悪いようにはしないと思うよ」

とぼとぼと歩く茅乃にルミが慰めを言う。無実の罪で島流しになった武士みたいな気分だった。

僻地っていったいどこのことだよ……しかも、悪いようにしないって、もう既に最悪だ。入社以来ずっとしゃかりきになって働いてきて、こんなふうに使い捨てられる。これ以上に悪いことなどそうそうありはしない。

「転属願、出そうかな……」

「茅乃……」

今までどれだけ全力疾走がきつくても、自分から瀬田係を放棄しようとしたことはなかった。

瀬田は厳しいが尊敬できる上司で、得るものも多かったし、瀬田もまた、それなりに満足して茅乃を使っているのだと信じていた。だが、社長の一声で、しかも女がらみで飛ばされてしまうような存在だったのなら、虚しいだけである。ましてや、これまで絶

対ゼロだと言い切れていた薄紅色の想いが、もしかしたら自分の中にあるかもしれない、なんて気付いてしまったあとでは……

転属願はその性格上、上司決裁を必要としない。書類を書いて直接人事に提出する。それだけだ。出した書類を考慮するかどうかは上の判断である。どうせ飛ばされてしまうのなら、これは自分の意志なのだという形だけでもつくりたかった。そうでなければ哀しすぎる。

茅乃は一旦会社に戻り、人事部でルミの机を借りて転属願を書いた。

「相馬は⁉」

重役連中と昼食会に行っていた瀬田が、足音高く営業部に駆け込んできた。常に冷静沈着で、怒りさえも冷たい炎のようだと評される瀬田にしては珍しく激高している。

茅乃は外に出たまま戻っていない。行動予定を書いたホワイトボードには「直帰」という文字。それを見た瀬田が何度携帯に連絡しても、彼女が出ることはなかった。

「京本、相馬が出るまで携帯鳴らせ！」

え、俺ですか……と思いながら京本浩二は瀬田を見る。茅乃は彼の二年先輩で、彼を直接指導している上司だった。

「でも、相馬さん、今日は……」
「契約日なのはわかってる。さっさと終わらせて戻ってこいと伝えろ」
直帰と書いてあるのに……とは言えなかった。それぐらい瀬田は激怒している。そんな状態でも瀬田は、茅乃が自分からの電話には出なくても、京本のヘルプには絶対に対応すると冷静に踏んでいる。瀬田に睨(にら)まれながらかけた電話は予想どおり一発でつながり、茅乃の明るい声を届けた。
「どうしたの？　何かあった？」
どうしたのはあなたでしょ……というか、俺をどうしてくれるんです……と泣きつきたかった。
後ろで瀬田部長が睨み付けてるんですけど……と。
「契約が終わったら帰社してください」
「直帰って書いたはずだけど？」
「部長命令です」
「……部長は、夕方から取引先がらみで外出。私はそれまでには帰れない。だから、用があるなら明日にしてください、って伝えて」
「相馬さん！」

「今、時間ないの、よろしくね」
その言葉を最後に電話が切れた。相馬さん酷(ひど)すぎます……と呻(うめ)きながら振り返ると、相変わらず恐ろしげな顔で瀬田が睨んでいた。
「あの……」
「なんだ？」
「部長、夕方からお出かけの予定ですよね？」
「それが？」
「それまでに戻れそうにないから、用があるなら明日にしてくださいって……」
「ふざけやがって……」
歯ぎしりの音が、周囲にまで聞こえそうだ。瀬田の頭にさらに血が上ったようだった。
三十分ほど前、面白くもない食事会から戻った途端、瀬田は人事部長の萩原(はぎわら)に声をかけられた。
「専務、ちょっとよろしいですか？」
「なんだ？」
「転属願が一件出ています。一応お知らせしておいた方がいいかと」

営業部長には関係ない話であるが、人事権を持つ専務としては無視もできない。瀬田は、萩原が差し出した書類を受け取って目を走らせ、次の瞬間、息を呑んだ。

「なんだこれは⁉」

萩原が面白そうに瀬田を見ていた。

彼は実は瀬田と同期で、その上大学時代からの悪友である。今まで瀬田が何を思って相馬茅乃を子飼いにしてきたのか、その理由を知る数少ない人間であった。

何度となく出された『相馬茅乃転属案』を悉く握りつぶし、それどころか、研修途中でそれ以上他の部署を回ることもストップさせて、茅乃を「瀬田係」に就任させたのは、瀬田総司その人だった。

「ごらんのとおりです」

「破棄してくれ」

「できません。本人からの転属願は直接人事会議にかけることになっています。上司の意志は関係ありません。でもまあ、専務はいずれごらんになるでしょうから、予めお知らせしただけです」

「萩原！」

「というのは、まあ表向き。どうせ知らなかったんだろう？」

萩原は突然友人口調になった。そもそも専務として呼び止めたのではないのだろう。この一枚の書類が及ぼす悪友への影響を考えると半分面白くて、さらに半分痛ましくてリークしただけに違いない。他の相手なら許されないことではあるが、瀬田は人事権を持つ男だ、多少のフライングは許容範囲と判断したのだろう。

「知るわけないだろうが！」

「だろうな。昼休みに悲愴な顔で書き殴っていった。なんかあったのか？」

「なにもない！　どうせあの馬鹿、変な勘違いでもしたに決まってる‼」

「落ち着けよ。とりあえずこれは一旦お前に返す。本人説得して取り下げさせろ。さもないと社長は大喜びで彼女をどっかに飛ばすぞ」

これまでに何度もそうされかけた。娘かわいさに、常に瀬田のそばにいる茅乃を排除せんと、あの手この手でいろいろな部署に異動させようとした。今までは全て瀬田が阻止してきたが、本人からの希望が上がってはどうしようもない。

「まだ俺しか見ていない。今ならなかったことにできる。俺より上に見られたらアウトだ」

「わかった。すまんな」

すごい勢いで営業部に戻っていく瀬田を見送り、萩原も自分の机に戻った。ふと視線

を感じて周りを見回すと、くだんの相馬茅乃と同期の部下がこっちを見ていた。
萩原は一瞬にして経緯を悟る。これは女の友情と男の友情の真っ向勝負。
「毛利君、ちょっと」
わざとらしすぎる咳払いとともに部下を机に呼んだ。
「わかってると思うけど、人事情報の漏洩は御法度だよ」
「お互い様ですよね」
生意気そうに言う部下は、時折瀬田から話を聞く相馬茅乃と確かに類友だ。
「まあな。でも俺の方はもともと流れる予定の情報だし、相手は聞く権限を持ってる。だが君は違う。今回は目をつぶるけど、次はないよ」
「わかってます。二度としません。でも……」
「なんだ？」
「専務は逆玉ねらいじゃないんですか？」
「今、そんな風に見えたか？」
瞬時に変わった顔色。その場で書類を破り捨てそうになっていた。さらにあの立ち去りよう……。どれを見てもとてもじゃないが……
「いえ……ぜんぜん」

「なら、そうなんだろうよ」
そう言うと、萩原は何事もなかったかのように仕事に戻った。

社内にいるはずがないと思ったが、案の定、相馬茅乃は外回りに出ていた。携帯で呼び出しても応答がない。留守番電話にメッセージを残しても、コールバックすらしてこないところを見ると完全にスルーする気らしい。
彼女は人事部長と瀬田の関係をよく知っているし、専務としての瀬田には転属願を見る権限があることもわかっている。恐らく、自分が書いた転属願が、すぐに瀬田の知るところとなると察していたのだろう。
京本に連絡させても帰社する気はなさそうだし、彼女の言うとおり、これから外出しなければならない。何を思ってこんなことをやらかしているのか一刻も早く問い詰めたいが、今は無理だ。
やっとのことで自分を納得させ、瀬田は営業部をあとにした。

「只今戻りました」
そう言いながら営業部のドアを開けた茅乃に、京本はぎょっとした。

時刻は午後七時過ぎ。こんな遅い時間にわざわざ会社に戻ってきたところを見ると、「直帰」と書いたのは完全に目くらましだったのだろう。考えてみれば、契約書を持ったまま帰宅などできるはずがない。既に瀬田は出かけている時刻だし、彼女にしても瀬田の反応が知りたいはずだ。

二人の間に何があったかはわからないが、相馬茅乃は成り行きを知る人間が残っているかもしれない……と思いながら帰社したに違いない。

「おかえりなさい。直帰しなかったんですね」

なにがあったんですか？　という台詞が口から出かかったが、茅乃の立ち入り禁止的な雰囲気は、昼休み直後の瀬田と酷似したものがあって、おいそれとは聞けなかった。

彼女は、やっぱり契約書を置きに来たの……と微かに笑い、明日の自分の予定を確認しながら訊いてくる。

「部長、何か言ってた？」

「いえ……」

あれきり瀬田は口もきかずに専務室に戻っていった。普段、営業部をベースにしている瀬田にしては珍しいことである。そして彼はそのまま外出したらしい。

「京本君、まだ仕事あるの？」

「見積もりが少し残ってて……」

「しょうがないなあ……」

茅乃は、京本がやりかけていた見積もりの画面をちらっと見て、『少し』ではないことをあっさりと見抜いた。パソコンの前から京本を追い立てると、代わって自分が座り、瞬く間に進めていく。

「この机とベッド、セット販売だったはずだけど、数量に違いがあっていいの？」

タッチタイピングは言うまでもなく、入力ミスをすることもほとんどないし、入力するデータに怪しげなものが混じっていようものなら、瞬時にはじき出して確認を求めてくる。

「あ……その店、ベッドの在庫を持っているんです」

「仕入れ値、相当違うけど、赤は覚悟なのね？」

「決算前に不良在庫落としたいらしいので……」

「了解」

そんな会話の間も茅乃の手は止まることがない。いつもながら見事なものだ、と京本は見惚れてしまう。そして、しばらくしてようやく見惚れている場合ではなかったと我に返った。

「相馬さん、俺がやりますから」
「いいよ。部長の相手させたお詫び」
居心地悪かったでしょ？　とまたひっそりと笑う。いったいこの人たちに何があったのだろう。
普段は絶妙のコンビネーションで仕事をしている切れ者の瀬田と、その懐刀と名高い相馬茅乃。
仕事のことでもめた余韻を残していることは度々あったが、今日のような不可解な空気は初めてである。その理由を知る者は誰もおらず、今日の午後はとにかく重苦しかった。
「はい、終了。お疲れさま、帰っていいよ」
三十分で大量の見積もりを終わらせた茅乃がデータをプリンターに転送し、上司然として言った。
「相馬さんは？」
「私も帰るよ」
と言いながらも、茅乃は机の引き出しを開けて、なにごとか考えている。かと思うと、いきなり部屋の隅に畳んで置いてあった段ボールを組み立て、私物をどんどん入れ始めた。

「相馬さん、何やってるんですか！」
まるで会社を辞めるときのような整理の仕方に、京本はつい大きな声を出した。
「ああ、京本君、まだいたんだ」
そこにいるのが悪いみたいな言われように、さすがに京本もむっとする。
「いますよ。目の前でそんなことされたら気になって帰れません」
目の前の段ボールと京本を交互に見比べ、茅乃はため息を漏らした。
「そうか……そうだよね。ごめん……」
「どうしたんですか？　相馬さん、なんかおかしいですよ」
「私ね、多分転属になる」
そう言いながら茅乃はまた手を動かし始める。京本はたまらずその段ボールを奪い取った。
「そんなはずないじゃないですか！　部長がそんなこと許すはずがないでしょう！」
「部長はもうすぐ部長じゃなくなるんだって」
「え……？」
営業部長と専務の兼任が無理であることくらい、社内の人間なら誰でもわかっている。

今までそれをなし得たのは、偏に瀬田聡司が有能だったからだ。だが、それももう限界だろう。専務より上の地位にのぼるためには、営業部長という職は邪魔でしかない。

京本の耳にすら、瀬田が次期社長候補だということ、そして、その前提として社長の娘との縁談があることは届いている。

瀬田を営業部から切り離し、同時に邪魔な相馬茅乃を流罪に処す。上の意図はみえみえだ。

「ま、そういうこと」

茅乃は京本から段ボール箱を取り返し、詰め込み作業を再開する。

「瀬田部長から内示でもあったんですか？」

だとしたら許せない。こんな形でこの有能な人を使い捨てるなんて……

「違うよ。いくらあの人でもそんなことはしない。ただ板挟みになってる可能性は高いでしょう？　だから自分で転属願を出したの。この状況なら百パーセント好きなところに行かせてもらえると思わない？　どこがいいかなあ……」

「そういうことか」

後ろから低い声がした。

「部長！」

驚いた京本が声をあげる。直帰予定者の帰社パート2であった。

五年間で、あまりにも聞き慣れてしまった男の声。

茅乃は、自分がやりそうなことはこの上司もお見通しなのだと今更のように悟るが、それも後の祭り。振り向くこともせずに淡々と作業を続けるしかなかった。

「京本、帰れ」

瀬田の一言で、彼は鞄と上着をひっつかんで飛び出していった。印刷中の見積もり書は完全放置である。

薄情すぎるぞ、京本！　と心の中で罵ってみても、自分が彼と同じ立場に立たされたら、やっぱり脱兎のごとく逃げ出すだろう。それぐらい瀬田の声に滲む怒りの色は濃かった。

営業部にはもう茅乃と瀬田しか残っていない。

「ずいぶん早くに終わったんですね。それともなにか忘れ物ですか？」

時計を見るとまだ八時を過ぎたばかりだった。確か瀬田はどこかの会社の何十周年記

念だかのパーティに出席予定だった。午後六時開始だったから、移動時間を差し引くと、まだ始まったばかりのころに会場を出たことになる。何故こんな時間に会社に戻っているのだろう。仕事放棄もいいところだ。

「ものすごく嫌な予感がしたんでな。挨拶だけすませて抜けてきた」

「へえ……そういう勘、当たる方でしたっけ？」

そう言葉を返しながら、茅乃は思う。

当たるよなあ……普段はものすごく計算して動いているくせに、最後はそういう野性じみた直感に頼って生き抜いてきたタイプだ……

瀬田はじろりと茅乃の手元を見た。

「何をやっている？」

「ごらんのとおりです。部長もそろそろ机の片付けに入った方がいいですよ。なんなら手伝いましょうか？　それとも机ごと専務室のと入れ替えるとか？　でもあっちの机の方が立派ですよね」

軽く流そうとする茅乃を全く無視して、瀬田は内ポケットから一枚の紙を取り出した。

「これについて説明してもらおうか」

「私の転属願！　もう見たんですか、フライングもいいところです。第一、直属の上司

が見ていいものじゃありません」

「俺が専務だってわかってて言ってるんだろう？　萩原は実にいい奴だ」

まったく……男の友情なんてくそくらえである。とはいえ見られた以上は仕方がない。正面突破するしかなかった。

「先手必勝です。一方的に飛ばされるよりもましじゃないですか」

茅乃に先手必勝を教え込んだのは瀬田だ。それも徹底的に。とにかく目の前から茅乃を消したい社長一派は、今なら茅乃がどこに転属希望を出そうが黙って判を押すだろう。

「却下だ」

「部長にそんな権限ありません。そういう横暴を避けるために、人事に直接出すことになってるんじゃないですか」

「営業部長にはなくても専務には人事権がある。とにかく却下だ」

「嫌です」

「転属願は必要ない。どのみちお前は四月一日付けで異動になる」

「どこの僻地（へきち）へ飛ばす気なんですか？」

理不尽な異動については諦める。それならせめて場所ぐらい自分で選ばせてくれというのが、そんなにわがままな願いなのだろうか。五年も手足となって働いてきたのに……

だが瀬田は平然と言った。
「僻地？　馬鹿を言うな。お前の転属先は専務室に決まっている」
そんなふざけた話があるか。そんなものが認められるはずがない。それでは全く意味がない。逆玉を捨てたいのかこの男は！　と茅乃は呆れ返る。
「考えられません」
「誰が五年もかけて仕込んだ部下を手放すようなことをするか。瀬田係にお役ご免なんぞない」
だから、その瀬田係っていうのをやめろ瀬田聡司。手放さないと言われて嬉し泣きしそうになるな相馬茅乃、意味が違う。
茅乃は必死で自分に言い聞かせる。ここでどこかに飛ばしてもらわねば、最悪自分は首になる。この歳で就活をやり直すぐらいなら僻地上等、と茅乃は決意も新たに営業部長兼専務を睨み返す。
「社長は認めたんですか？」
「なんかほざいてたが、認められないなら格下げでも何でもしろと言ったら諦めた」
だめだ……話にならない。この男は真性のすっとこどっこいだ。うっかり自分の想いを口走って、こんな男と手に手を取って心中なんてまっぴらごめんである。

「もういいです。さっさと僻地に飛ばしてください」
その方がずっといい。社長の娘に恨まれながら、無実の罪を責められ続けるぐらいなら、ど田舎の営業所で電話番でもしていた方がいい。そもそも株式会社安海は僻地に支社なんて持っていない。みんなそれなりの都市なのだ。どこに飛んでも、コンビニぐらい存在する。負けるな相馬茅乃。
「返してください、その転属願」
かくなる上は、社長に直訴してやる。二つ割りの竹に挟んで大名行列に突入してでも！
それなのに、茅乃の悲壮な決意はあっけなく散らされた。
「駄目だ。こんな物はいらない」
そう言うが早いか、瀬田は茅乃が書いた転属願をシュレッダーにかける。昔なら目の前で破り捨てるところだろうが、今は文明の利器が代行してくれる。
小気味よいぐらいにさくさくと千切りにされていく転属願。切れ味のよさは事務機メーカーの折り紙付きだ。多少のやかましさは御愛嬌……
転属願の末路を見届けた瀬田は、ひどく傲慢に、そして満足そうに頷いてシュレッダーの電源を切る。
いずれにしてもこれでいいわけがない。早急に対策が必要だった。

†

「よく、そのまま放免されたわね」
と毛利ルミが感心したように言った。
「限界はわきまえてると思うよ、部長も。あの状態で何言っても無駄だって。まあそれはお互い様なんだけどね。けんかしてる犬みたいに唸り合ってても仕方ないし」
シュレッダーに刻まれた転属願を見送ったあと、瀬田を一睨みした茅乃は、一言も口をきかずに営業部を出た。そのままルミを呼び出し、二人で行きつけの居酒屋に来たところだ。
流行のチェーン店ではなく個人経営の昔ながらの居酒屋は、安くて美味くて造りもこぢんまりしていて、内緒話にはうってつけ。相談事があるときはここと決めている。
魚主体の料理と東北の地酒を頼み、まずは乾杯と杯を合わせたところだった。
「あんたのところの部長も酷いよね。いきなりタレ込むか？」
恨めしく思いながらくってかかってもルミは平然としている。
「まあ瀬田専務とは付き合いが長いから、あっちの味方なのは仕方ないかな」

「そういうのはなしにしてもらわないと困るよ、人事部なんだから」
「そうよねえ……」
なにがそうよねえ……だ、と心の中で突っ込みながら、茅乃はイカの一夜干しを小皿に取った。
いい年こいた女にとってイカほどいい肴はない。ローカロリーでタウリンたっぷり。コレステロールも溜まらないし、いざとなったら誰かに見立てて食いちぎれる。茅乃はまるでそれが上司であるかのようにイカに噛みつく。一夜干しなのに思ったよりきいている塩が憎い。
さては店主、酒呑み仕様でさらに塩を振って焼いたな……畜生、どいつもこいつも食えない奴！
「あーあ……もう強権発動でさっさと飛ばしてくれればいいのに」
「それが嫌だから転属願を出したんじゃなかったの？」
「そりゃそうだけど、だからといって一生瀬田係も勘弁してほしい」
「あら……そうなの？」
「そうだよ！　この状況で専務室に転属させるなんて社長相手によく言えたもんだよ」

「厚いよねー専務の面の皮」
「鉄面皮って部長のこと言うんだよ」
でも……とルミは思う。
その鉄面皮は少々綻びかけてるような気がする。昼間、茅乃の転属願をかっさらっていった瀬田の姿は、どう見てもただの上司と部下以上のものを思わせた。しかも、取引先のパーティをぶっちぎって帰社したという。優先順位はあきらかに茅乃の方が上ということだ。とすれば、少なくとも瀬田の方は茅乃に何らかの特別な感情を抱いているとしか思えない。
「瀬田専務があんたのこと好きだったらどうする?」
直球で訊くと、茅乃は幽霊でも見たような顔をした。
「え……」
「可能性、ゼロじゃないと思うけど?」
ルミは長い付き合いの友人をじっくり観察する。今までなら、幽霊を見たような顔のあと、豪快に笑い飛ばしていただろう。けれど、今の茅乃はとてもじゃないが笑い出しそうには見えない。
「……スルー」

その一言を絞り出すまでの間の長さが痛かった。
「スルーなの?」
「勘弁してよ……あらゆる意味でさ」
茅乃はごくり……と冷酒を飲み下し、口の中に残っている塩辛さを洗う。よく冷えた日本酒でも洗いきれない塩辛さは、どうやらイカのせいではないらしい。
グラスが空になったことに気付いた茅乃は、しかめっ面のまま冷酒を注ぎ足そうとする。
「ぶっちゃけさー」
そう言いながら、ルミは茅乃の手から冷酒の小瓶を取って、彼女のグラスに注いでくれる。深夜の居酒屋で、日本酒の手酌は妙齢の女にはあんまりだと思ったのだろう。茅乃は軽く頷くことで礼をし、改めてルミを見た。
「好きだよね。専務のこと?」
もしかしたら酒を噴くか⁉　とでも考えたのか、身構えているルミを茅乃は軽く笑う。
「一日に二回も同じこと訊かないでよ」
「答え、変わってるかと思ってさ」

「嫌な女だね、ルミ」
「付き合い長いしね。で？」
瀬田聡司が自分を好きである可能性。自分の気持ちと向き合う前にその可能性について茅乃は考える。
ゼロじゃない、とルミは言う。確かにゼロではないかもしれない。いや、今日の様子から考えれば間違いなくゼロではない。けれどそれに、茅乃自身の想いを共鳴させることに意味があるのか。
瀬田が茅乃に、ほんのかすかでも想いを寄せているとして、茅乃がそれに応えた場合、いったい彼の将来はどうなるのだろう。社長の椅子はもう手の届くところにあるというのに……
お気に入りの部下と――いや、ちょっと気になる女と社長の椅子。そんなもの、天秤に載せるまでもない。ナンセンスだ。
そして茅乃は結論を出す。
「スルー」
五年かけて、二人の間には上司と部下を超えた感情が育った。ルミの言うとおり自分の想いは瀬田にある。恐らく瀬田の想いも自分にあるのだろう。だが、その二つを繋ぎ

合わせることなどできない。
「あくまでスルーなの？」
「部長の将来ぶっ壊して駆け落ちできるほど脳天気じゃない」
「……そっか」
黙って社長の娘と結婚すれば、瀬田の将来は安泰。その社長の娘が箸にも棒にもかからないような醜女性悪ならともかく、安海香は清楚な美人である。良家に育った女性ならではの穏やかさと賢さを併せ持つ、絶滅寸前の大和撫子。安海香に社長の椅子がくっついていなかったとしても彼女を欲しがる男は列を成すだろう。その彼女が是非にと願う男が瀬田聡司なのだ。邪魔なんてできるはずがない。
瀬田に想いを寄せるならば、当然願うは瀬田の幸福である。その幸福は安海香が連れてくる。万が一、彼が瀬田係ごときに血迷っているとしたら、バケツで水をぶっかけてでも目を覚まさせる必要がある。とはいっても、さすがに直属上司にバケツで水というのも差し障りがある。従って無難なところで『スルー』であろう。
「うまくいかないもんだね」
「まったく」

ルミは茅乃の物憂げな表情からその意味するところを知った。

想いを肯定しようとはしないものの、その実、茅乃は瀬田のことがとても好きなのだ。そもそも瀬田が自分に振り向くはずがないと思うのも、振り向いたとしてもそれは間違っていることなのだと思うのも、全て瀬田を想うからこそだ。瀬田への感情が薄いものなら、彼の将来など心配するはずもない。

これまで何度となく疑い、冗談のように訊ねてきたが、そのたびに茅乃は完全否定してきた。

それは全て、火があるからこそどんな煙も立たせたくないという彼女の無意識の配慮だ。だが、その配慮もいよいよせっぱ詰まった状況に来て綻んだ、というところか。

現状、彼女は無実ではある。どんな想いも瀬田に対して口にしていないし、瀬田の方も何かを告げたわけではない。二人とも確かに無実だ。無実なのだが動機はある。実行の伴わない想いほど質の悪いものはない。

「お見合いでもするかなあ……」

なんて呟きながら、茅乃はやけくそのように杯を重ねた。どれだけ呑んでもちっとも酔えないだろうに。

茅乃が見合いをするなんてことになったら、あの上司はそれこそすごい勢いで乱入するんじゃあるまいか。ルミは想像してふっと笑う。いっそそういった修羅場でもあれば、この面倒くさい二人は落ち着くところに落ち着くのかもしれない。茅乃が潔くそれを受け入れるとは思えないけれど……

「見合いはやめた方がいいよ。相手が気の毒だし」

「だよねーお局だしねえ……」

違うよ、間違いなく瀬田専務に切り刻まれるからよ、と言ってやっていいのかどうか悩みながら、ルミは茅乃の頭をぽんぽんと叩いた。

†

茅乃が社長から直々に呼び出しを受けたのは、その週末のことだった。瀬田が外出していることを確認した上での呼び出しとくれば、話の内容は聞かなくてもわかる。

立場としては社長が上。でも、きっと今の彼は後ろめたさのあまり、自分が社員である茅乃に見切りをつけられるかも、という気分でいるに違いない。引導を渡すのはどっちなんだろう……。そんなことを思いながら、茅乃は社長室に向かった。

私物を詰め込んだ段ボールは、机の下に置いたままだ。片付けようかとも思ったが、

どうせすぐに専務室行きだ、と瀬田が言うのでそのままにしてある。彼の言うことを鵜呑みにするほど楽天家ではないが、異動になることはほぼ間違いない。

あの夜以降、茅乃は瀬田の説得を諦めた。聞く耳持たぬ男の耳元で叫び続けるほど暇じゃない。しかも、どうかするとうっかり、あるべき方向とは真逆の言葉を吐いてしまいそうで怖い。なにやらもの言いたげな瀬田の視線はもっと怖かった。

決算を翌月にひかえた目の回りそうな忙しさは、常ならうんざりだが、今期に限っては非常にありがたい。予算達成を目指して駆け回ることで、全てを封印できる。

そして、待望の社長呼び出し……これでやっと決着だ……

茅乃は、段ボールをどこに持ち込めばいいのかを聞くために、社長室のドアをノックした。

「忙しいところすまないね」

絶対に悪人にはなれそうにもない社長、安海良一が本当に申し訳なさそうに言う。

冷静に考えれば、自分の娘のために社員を飛ばすなんてあってはならないことである。ましてや、瀬田と茅乃の間に私的な感情の交流はない。事実上はない。あるのは香の一方的な不安だけなのに、その不安を払拭したいがために茅乃を排除する。そこまでしても、安海は自分の後継者に、娘婿に瀬田が欲しいのである。だがそれも、瀬田の能力

を考えれば当然のこと。茅乃は安海を責める気持ちにはなれなかった。

「それで……」

と言いよどむ安海良一。茅乃は既に何度もくくった腹をさらにもう一度くくり直す。

「話の中身は見当がついています。恨みもしないし、訴えもしません。手っ取り早く教えてください。私はどこに行けばいいんですか？」

それでも首になるよりはましなのだ、と自分に言い聞かせる。

この年齢で再び就職活動をするのは辛い。全国のどこに飛ばされても、株式会社安海の社員であるならばそれなりの生活が保障されるだろう。このご時世、それだけでもありがたいと思うべきなのだ、と。

「君には申し訳なく思っている。だが、娘は君の存在が気になって仕方がないらしい。瀬田専務と我が社の将来のためにここは一つ……」

正面から親馬鹿を晒さねばならない社長も気の毒だ。というよりも痛ましくて聞いていられない。

「前置きはいいです。ちゃんとわかってますから。行き先と着任日を教えてください」

なんて生意気な口調……と自分ですら思う。だが事情が事情だ。多少の無礼は許されるだろう。

「どこか希望の場所があるなら考慮するが」
答えは、あのシュレッダーに消えた転属願を書いたときから、既に用意してあった。
「札幌にしてください」
「それはまた……大阪とか名古屋で十分だと思うが……」
「会議が多すぎます」
ちょくちょく顔を合わせることになるのは困るんじゃないのか、と匂わせる。各地方の拠点となる大阪や名古屋では、本部役員が出席する会議も多い。だが、札幌営業所で重役クラスの会議が行われることはなかった。
娘の不安を取り除くためというのならば、徹底して会わないようにしてほしかった。瀬田の将来にとって邪魔にしかならない想いの息の根を止めるためにはその方がいい。
「わかった。ちょうど札幌営業所で欠員が一人出たところだ。では、着任は四月……」
茅乃は、無難な日付を提案しようとした安海を押し返すように言った。
「三月一日で」
安海はとっさに、卓上カレンダーで今月の残り日数を数えた。あと一週間で二月は終わってしまう。それでは準備が間に合わないだろう……と、人の良さを丸出しにして、心配の色を浮かべる。

「大丈夫です。土地勘もありますし」
「そうか……学生時代はあっちにいたんだったね」
茅乃は大学時代の四年間をそこで過ごした。涼しくて、寒くて、広くて、大らかで、しかも美味しかった札幌。東京に就職するときは後ろ髪を引かれる思いで『札チョンの二度泣き』という古い言葉を実感させられた。あの街なら、大丈夫。どうやら壊れそうになっているらしい心も、なんとか蘇生できるだろう。
「はい。知人もけっこういますし、楽しく暮らせると思います」
だからそんなにすまなそうな顔をしなくてもいい。どうにもならない想いを抱えて瀬田のそばにいるよりも、全く会わない方がずっと楽なのだから……
「じゃあ、人事に言って手配をしておく」
その言葉を聞いて、萩原の顔が茅乃の脳裏に浮かんだ。あのリーク魔をなんとかしておくべきだ。
「その件ですが……ぎりぎりまで伏せられますか？」
これまで以上に真剣な表情になった茅乃に、安海は怪訝な顔をした。
「人事に釘を刺してください。特に萩原部長に」
「しかし……」

「この繁忙期にイレギュラーな人事異動は混乱の元です。事前に聞いてしまったら送別会の一つでも、と思うでしょう。そんな時間はもったいないし、引継ぎに取られる時間ももったいないです」

「そうはいっても、引継ぎもなしに異動ではさらに混乱を呼ぶだろう」

「引継ぎは責任を持って書面で行います。だから私がいなくなるまで瀬田部長には内密に」

瀬田が知ったら何を始めるかわからない、と言う彼女に、安海は黙って頷かざるを得なかった。

瀬田が懐刀（ふところがたな）である相馬茅乃を簡単に手放すとは思えない。現に今まで何度も彼女の転属を阻（はば）んできた。その行為自体が、今回の強引な転属へと繋がったのだ。だからこそ、自分が去ることを知らせないでほしい。決算期という時期も悪い。これ以上の混乱はいらない。彼女のそんな主張はもっともだった。

本来ならば直属の上司、しかも専務であり人事権を持つ瀬田に知らせぬまま異動させるなどあり得ない話だ。だが、そもそもこの異動自体があってはならないことなのだから、今更そんなことを言っても始まらない。

立ち読みサンプルはここまで

相馬茅乃は、送別会はおろか、同僚への別れの言葉もなしに去るという。

安海良一は、瀬田が彼女を絶対に離さなかった理由を見せつけられた気がした。

穏やかそうな外見の内に、しっかりと存在する強さと理性。そして何よりも、組織を重んじる忠誠心。部下としてこれ以上望ましい個性はない。いや、部下としてだけではなく……

それでも、安海良一は娘がかわいかった。この存在を瀬田のそばに置く限り、娘が瀬田を得ることはない。それを確信させられてしまう。

すまない、親馬鹿だと笑ってくれ……と心の中で詫（わ）び続けるしかなかった。

「わかった。萩原君にはよく口止めしておく」

「よろしくお願いいたします」

ルミが聞いたらまた大騒ぎになるんだろうな……。今度こそ、萩原部長が守秘義務を全うしてくれればいいけど……と思いながら、茅乃は社長室をあとにした。

†